

薄れた大学側の警察アレルギー

6・18和泉の混乱から

○：本学連合教授会は大学の自治と教育・研究の自由を守る観点から、新次官通達に対して「さきのような観念と権限を表明するものである……」(略)として、当局の単なる治安対策的な大学紛争処理の在り方は、真の解決にすこしも役立たないばかりか、大学問題の自主的解決を阻害するものである。大学に対する教育上の配慮と判断を無視した警察当局の、一方的な判断を優先させることにより学内に警察権のほしほしまな行使を許すような事態になれば、もはや大学はその本来の機能を主体的に果たしえなくなる。(略) (昭和44年4月25日「連合教授会声明」)

○：われわれは今日の大学問題が単なる治安面の学生対策によって解決されることは考えない。治安当局の大学介入はかえって学内をいっそう混乱におとし入れ、激化する学内の秩序をさらに收拾のできないものにするのを強く憂うものである。(同日「学長声明」)

約一年前、大学側は別掲のよう、期限切れの迫った18日、本学は名、な員解を表明し、警察権力の大学介入に反対の意向を強調してき、アウトという事態に突入した。ところが、昨秋の機動隊導入、これは、警察側から、都内の主なロック・アウト以来、うって返って、大学に対して発した、ロック・アウトあること機動隊要請が行なわれ、今では警察と大学との癒、あらかじめ理想をたいたとはい、蓋を疑われるほど、暴発すべき事、え、六月安保決戦の第一のヤマ場であることほき出さない。学、場であった18日、15日を大学当、内秩序の維持を理由にした予備校、局は看過して来ただけに、余りに、も突然で不意を突かれたとの声、強かった。当日は、本校、生田が、比較的平穏だったとの和泉地区、は、ロック・アウト糾弾の声を、ずまづした。

六月十八日の全学ロック・アウト突入の際の和泉の混乱を見る、なから、学内間に「の」ってき、た大学当局への不信感をまへへて、みま。

◇ 六月二十日の安保条約の固定

この日は早朝から、ロック・アウトの新聞伝言を知ってか知らず、か登校した学生が平線・明大前、駅周辺や固く閉ざされた和泉校舎、の言葉は冷たく聞こえた。「声の、姿は見え、機械的に同じでを、

“オレ達の大学だ”

排除される学生に当局不信 続発する機動隊要請

「最近、学内外で他大学を含む、一部学生の暴力行為、業務妨害が頻発している状況にかんがみ、——と、ピカピカからの、これをロック・アウトの理由、だとする当局側には、説得力は感、じられなかった。といふより論理、以前の問題として、あまりにもそ、め相次いでクソッパ単位の運動が盛、それを取り巻く学生、いかめしい行動、

一年八組、二政経三年七組など個、別のクラス・ストを行なってきた、たどるが多かった。学生会中執、の力不足など全学的なマトメ役、に欠けられただけに、その価値は、大きいものがあつた。「われわれ、のクラス運動の任務でしかない、(法三生)とフチまけていたのが、印象的であつた。

十一時半、正門をこぎあげた、た、ドッあたりにはた学生が、校舎内に乱入した。ヘルメットの、学生はそれほど多くはなかった。



「喜び」と唐突さのために、興奮、意味でデモ行進する学生、いわゆる、「一般学生」といわれる部分も、かなりを占めている。それをた、冷たく見守る教職員。そこには対、話しなかつた。

たたちに機動隊が要請された。正門前に押り込んだ学生数十名、それを取り巻く学生、いかめしい行動、

○メートルといふところまで育、大学だと誰かが叫んだ。無言のうちに学生を殴りつけた。——学生のゲバルトを政治的、ゲバルトを押しこめる全、

「手注が成立した。(本紙44年8月14日号本理事の巻)

「機動隊など外部の力の導入、などに関しては、今のところ白紙、である。そういつてしまふだけ、したくないし、ま、警察、隊を入れてまで講義をした、い、は思わぬ。それは真の解決には、ならないからだ。それは学生、天、学どのソをますます深める、あり、(一)と、

——本紙44年10月10日付、中、川学長の巻)

「かたくなに警察権力の介入に批判的だった大正局。各大学に機動隊導入の相次ぐなか徐々に警察アレルギーは薄れつつ、完全な機動隊に閉ざれた和泉校舎付近一帯、正門前は、機動隊放水車がドッカンを響かせ、その回りで隊員が冷徹に蹴散らされた学生が対峙していた。

高登勢な機動隊の警備に、一人の学生が、声を張つたから叫んだ。

「警官さん見たか、これが大学の姿なんだ——」

学生の排除されるを目のあたりに見ながら、校舎内にいた教職員が、た正門の裏トビラをこめ、